

新入大学教員による 看護実習指導場面の 困難への対応行動

亀田 芙蓉(日本医療科学大学)

いとう たけひこ(和光大学) take@wako.ac.jp

河津 芳子(目白大学)

2017年12月17日(日)12:00~12:50

示説発表 PD-58-5

日本看護科学学会 第37回学術集会

仙台国際センター

日本看護科学学会 COI 開示

筆頭者氏名：亀田 芙蓉

所属名：日本医療科学大学

筆頭演者は、日本看護科学学会へのCOI自己申告を完了しています。

演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業・組織および団体等はありません。

研究目的・方法

目的: 先行研究で明らかとなっている新人教員の困難感をふまえ、その困難感に対する新人教員の対応行動を把握する。

方法: 全国の看護系大学の助教を対象に、自作質問紙による調査を実施した。
質問紙の選択項目をSPSSで、自由記述内容をテキストマイニングにて分析した。

結果

- 全国の看護系大学250校のうち、承諾の得られた**64校**の助教136名に質問紙を配付し、**74名(54%)**より回答が得られた。
- 困難の程度に基づき対象者を分類し、困難低群、困難中群、困難高群の3群（困難度パターン）が抽出された。

表1 新人教員が抱えている困難の内容

困難の項目	詳細項目
<p>A 実習指導の方法に自信がない</p>	<p>学生のレベルに合わせた指導ができない(37.8%) 指導の方法そのものがわからない(25.7%) 学生全員と公平に関わることができない(13.5%)</p>
<p>B 看護学生のもつ能力に対して不安や戸惑いを感じる</p>	<p>学生の社会性や意欲が乏しい(47.3%) 学生が他社との適切な関わりがわからない(14.9%) 学生が精神的に弱い(14.9%)</p>
<p>C 臨床と連携がとれず、実習環境を調整できない</p>	<p>学生が実習しやすい環境の調整が難しい(28.4%) 指導者に実習方法や目的を理解してもらえない(13.5%) 実習指導現場に頼れる人がいない(6.8%)</p>
<p>D 臨床指導者の理解・協力が得られず、関係性が築けない</p>	<p>臨床看護師から批判的に見られていると感じる(13.5%) 臨床看護師が学生に高いレベルを求める(13.5%)</p>
<p>E 職場環境や人間関係、業務内容などで余裕がなくなる</p>	<p>時間に追われて余裕がなくなる(37.8%) 他の業務との調整が難しい(33.8%)</p>

表2 困難に対する対応行動の内容

n=74(%)

対応行動の項目	困難A (自身の 能力)	困難B (学生)	困難C (実習環境)	困難D (臨床 指導者)	困難E (職場 環境)
1.文献を調べた	19(25.7)	4(5.4)	1(1.4)	0	1(1.4)
2.状況を記録した	12(16.2)	8(10.8)	1(1.4)	1(1.4)	1(1.4)
3.上司・同僚に 相談した	57(77.0)	39(52.7)	28(37.8)	17(23.0)	34(45.9)
4.指導者に相談した	15(20.3)	9(12.2)	11(14.9)	4(5.4)	1(1.4)
5.学生と面接した	17(23.0)	27(36.5)	1(1.4)	4(5.4)	0
6.何もしていない	2(2.7)	2(2.7)	2(2.7)	3(4.1)	9(12.2)
7.その他	2(2.7)	7(9.5)	5(6.8)	3(4.1)	10(13.5)

表3 困難度パターン別の対応行動

		「上司・同僚に相談する」対応行動をとった回数						
		0	1	2	3	4	5	合計
困難低群	n(%)	5(6.8)*	6(8.1)*	6(8.1)	1(1.4)*	0	0	18(24.3)
	調整済み残差	3.1	2.8	0.1	-2.4	-1.7	-1.3	
困難中群	n(%)	1(1.4)	1(1.4)	10(13.5)	10(13.5)*	0	0	22(29.7)
	調整済み残差	-0.9	-1.5	1.6	2.3	-1.9	-1.5	
困難高群	n(%)	1(1.4)	3(4.1)	8(10.8)	9(12.2)	8(10.8)*	5(6.8)*	34(45.9)
	調整済み残差	-1.8	-1.1	-1.5	-0.1	3.2	2.5	
合計	n(%)	7(9.5)	10(13.5)	24(32.4)	20(27.0)	8(10.8)	5(6.8)	74(100)

*p<0.001

表4 困難の対応行動による変化

			「上司・同僚に相談する」対応行動の回答数							
			0	1	2	3	4	5	合計	
困難Eの 「ネガティブな 感情の変化」 の回答数	0	n (%)	4(5.4)	8(10.8)	17(23.0)	11(14.9)	2(2.7)*	1(1.4)	43(58.1)	
		調整済み 残差	-0.1	1.5	1.5	-0.3	-2	-1.8		
	1	n (%)	2(2.7)	2(2.7)	7(9.5)	5(6.8)	6(8.1)*	1(1.4)	23(31.1)	
		調整済み 残差	-0.2	-0.8	-0.2	-0.7	2.8	-0.6		
	2	n (%)	0	0	0	3(4.1)*	0	1(1.4)	4(5.4)	
		調整済み 残差	-0.7	-0.8	-1.4	2.2	-0.7	1.5		
	3	n (%)	1(1.4)	0	0	1(1.4)	0	2(2.7)*	4(5.4)	
		調整済み 残差	1.1	-0.8	-1.4	-0.1	-0.7	3.5		
	合計		n (%)	7(9.5)	10(13.5)	24(32.4)	20(27.0)	8(10.8)	5(6.8)	74(100)

*p<0.005

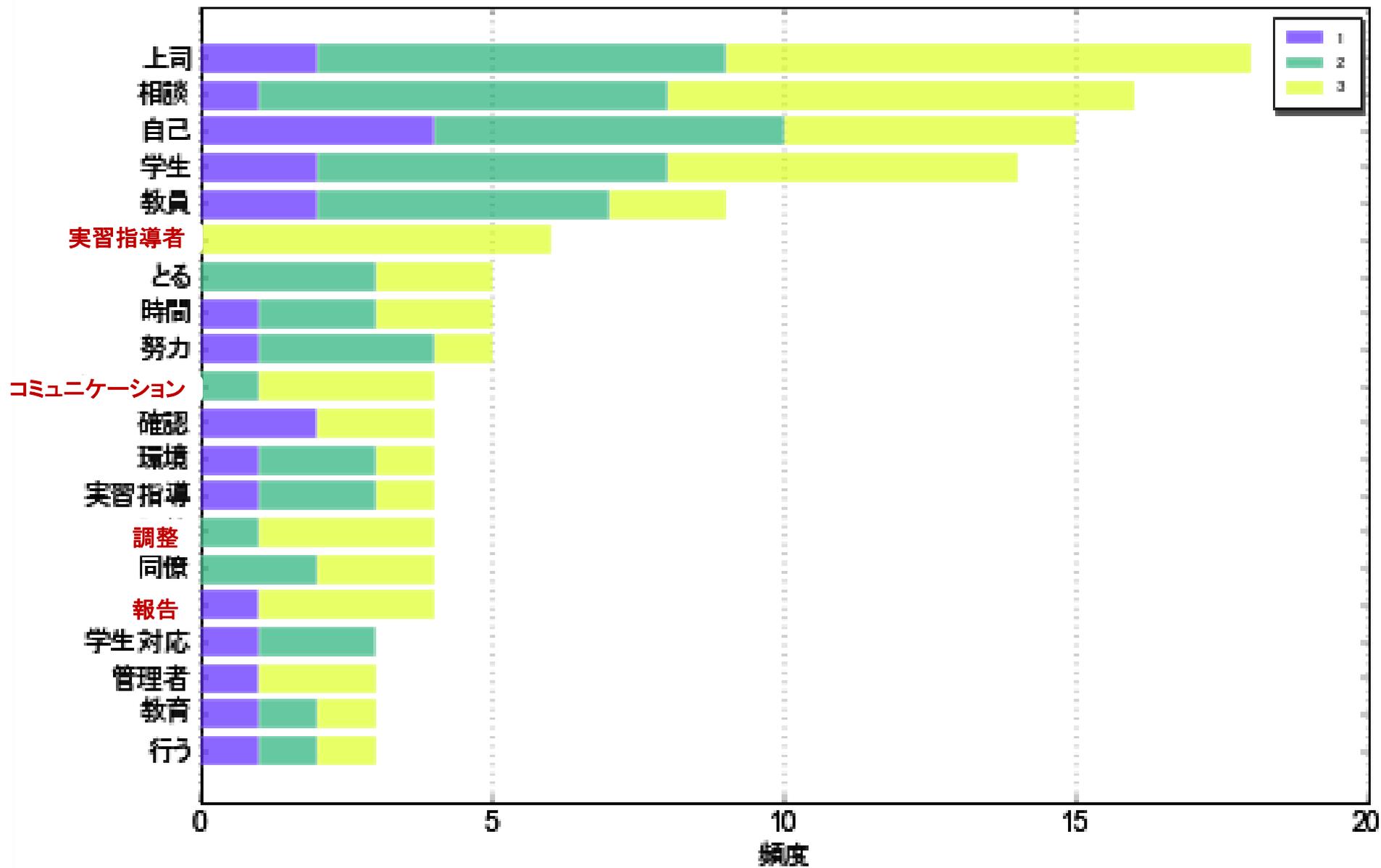


図1 困難への対応行動の単語頻度解析

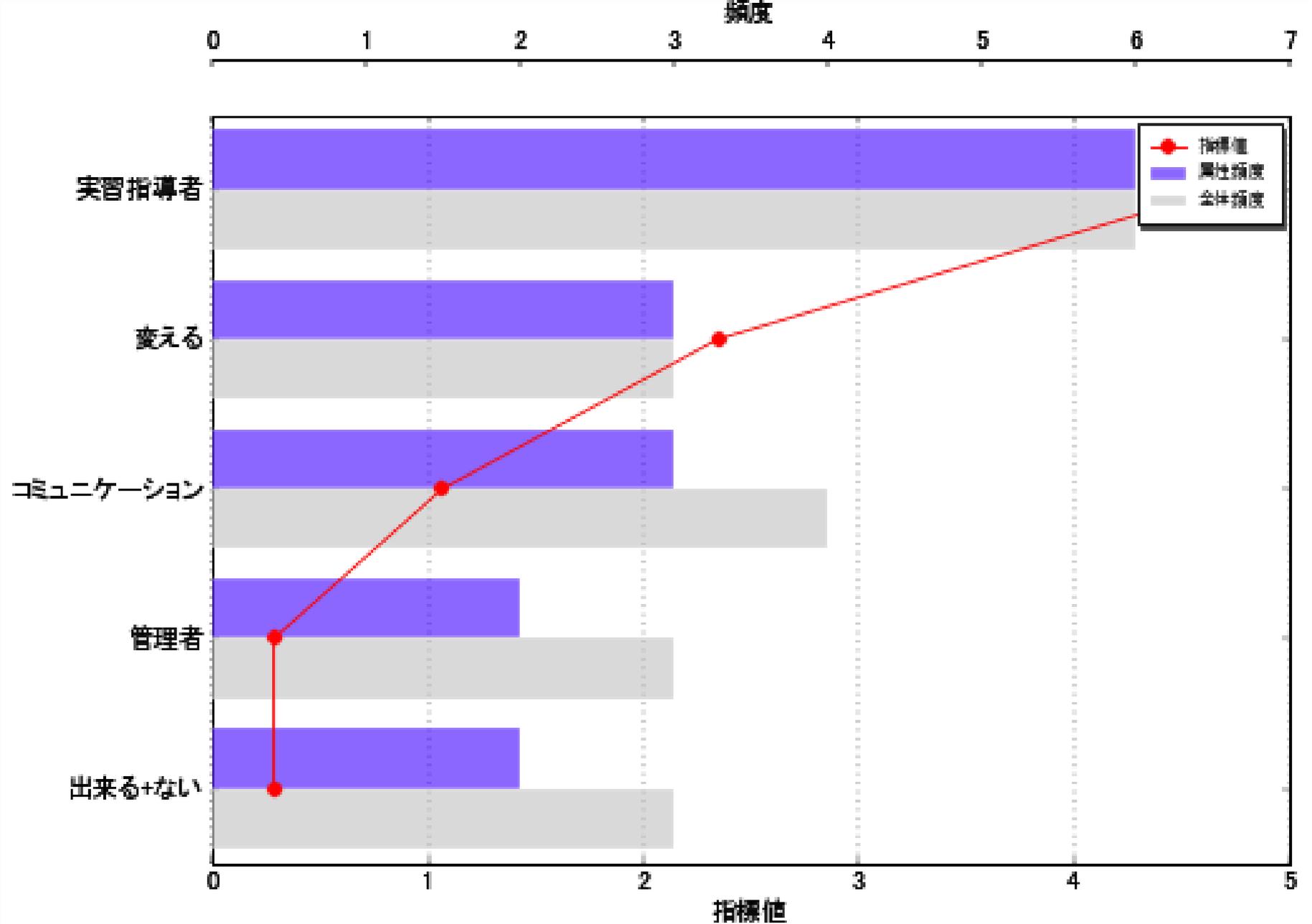


図2 困難高群の対応行動の特徴語抽出解析

考察

- 困難に対し、新人教員なりに困難を解決しようと努力していることが考えられる。
- しかし、新人教員の個別対応では限界があることが示唆された。
- 上司のサポートや、教員同士のチームワークの形成など、組織的な介入が求められる。
- 環境の整備やFDや研修会へ参加できる体制づくりが必要である。

**他の教員が新人教員の困難と
対応行動を理解・協力することが
新人教員の困難の軽減や解決に必要なである。**

まとめ

- 困難に対する行動は選択項目では「上司・同僚に相談する」が最多であった。
- 自由記述においても「上司」「相談」という単語が上位を占めていた。
- 「上司・同僚に相談する」という対応行動だけでは困難の解決までには至らなかった。

本研究にご協力頂きました看護系大学新人教員の皆様に心より感謝を申し上げます。



文献

- R208 亀田芙蓉・いとうたけひこ・河津芳子(2017) 実習指導場面における看護系大学の新人教員が抱える困難感と対応行動—テキストマイニング分析を中心に— 日本ヒューマンヘルス学会誌, 2(1), 25-34.
- G270 亀田芙蓉・いとうたけひこ・河津芳子 (2017, 8月) 実習指導場面における看護系大学の新人教員が抱える困難感 日本看護学教育学会第27回学術集会 那覇